

令和元年5月17日現在

機関番号：34304

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K21088

研究課題名（和文）東欧と東アジアにおける近代化の記憶とコミュニティに関する比較社会学的研究

研究課題名（英文）Comparative sociological study of memory, modernity and community in Eastern Europe and East Asia

研究代表者

菅原 祥（SUGAWARA, Sho）

京都産業大学・現代社会学部・講師

研究者番号：80739409

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では日本とポーランドを研究対象として、「ニュータウン」や「団地」のような、戦後の両地域において共通して見られた特徴的な都市空間に着目し、そこにおける近代化の記憶のあり方を比較社会的に考察することを目標とした。研究の結果、日本でもポーランドでも、戦後に建設された団地やニュータウンのような都市空間が一種の「文化遺産化」やノスタルジアの対象となっている現象が確認できた。また、特にポーランドの事例においては、こうした社会主義の遺物の文化遺産化が、逆説的にも「社会主義」に極力言及しないことによって可能になっているということが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀の近代化経験を現在の時点からどのように振り返るかということは、日本のみならずやはり20世紀に大きな社会変動と上からの近代化を経験した東欧の旧社会主義圏においても重要な課題であり、この点に本研究の大きな学術的意義がある。特に、日本においてもポーランドにおいても、近年、過去の自国の歴史を理想化するような政治的傾向がますます強まっていることを考えると、そうした傾向を相対化し、近過去に関する新たな想像力のあり方を明らかにする本研究の社会的意義は大きいと言える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine the similarity of the memory in public housing complexes in Poland and Japan in the context of post-war modernization and its aftermath. Such public housing complexes (“danchi” in Japanese and “osiedle” in Polish) were typical housing condition for both Japanese people in the period of “economic miracle” and Polish people in the period of “building socialism.”

Findings of this study are as follows; (1) In both Poland and Japan, post-war housing complexes has become objects of heritagezation or nostalgia. In Poland, some of the socialist osiedla are now treated as cultural heritages. On the other hand, in Japan, danchi are frequently treated as sites of nostalgia in recent literature and popular culture. (2) In Poland, such “heritagization” of the relics of former socialist period does not occur directly, not referring to the socialism itself.

研究分野：社会学

キーワード：ポーランド 団地 社会主義 記憶 文化遺産 ノスタルジア ユートピア 近代化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

20世紀の旧ソ連圏・東欧におけるかつての社会主義体制およびそれが目指した社会主義的ユートピアのプロジェクトは、1989年の東欧革命や1991年のソ連崩壊から30年近くが経ち、近年ますます「過去のもの」としてみなされるようになりつつある。他方、この間の文化研究や文化人類学の分野においては、これら過去の過ぎ去ったユートピアを今一度検討し、それが終わった現在の社会状況を改めて問い直すような、「ポスト・ユートピア研究」とでも呼びうるような一連の研究の流れがあった(Buck-Morss 2000; Boym 2001)。とりわけそこで問われるのは、旧東ドイツにおける「オスタルギー」(東ドイツへのノスタルジア)現象に典型的にみられるように、人々が社会主義の「過去」を現在において想起するということを通じて、いかにして現代社会へのクリティカルな視点を生み出したり、あるいはかつてのコミュニティの共同性が崩壊した後の現在における新たな共同性の再生を希求しているかということであった(Berdahl 2009)。本研究課題開始以前に私が取り組んでいた研究はまさにこうした問題関心に導かれていたものであり、そこにおいて私は旧東欧のポーランドを中心として、20世紀の社会主義体制下におけるモダニティの経験がそこに生きる人々にどのような影響を与えてきたのか、また、ポスト社会主義と言われる現在の東欧の社会状況の中、これら過去の社会主義の記憶が現地の人々にどのように扱われているのかを明らかにすることを目指した。具体的には、ポーランドの社会主義時代に建設された団地であるノヴァ・フータ地区の住民を対象にインタビュー調査を中心としたフィールドワークを行い、社会主義時代の記憶がそれらの住民にとってどのような重要性を持っているのかを明らかにしてきた。

他方、日本の社会学会においては、日本がかつて経験した近代化経験を、西欧近代とは異なる特徴を持つ「圧縮された近代化」として捉え、東アジア諸国の経験などと比較するような視点が存在している(落合編 2013)。このような観点から見ると、戦後の社会主義体制によって急速な「上からの近代化」をこうむってきたポーランドをはじめとする東ヨーロッパの経験もまた、これら東アジア地域と共通の体験の土台を持つものとしてとらえなおすことが可能である。本研究課題はこのような観点から、私がそれまで行ってきた東欧の旧社会主義圏の「ユートピア」と「記憶」に関する研究をさらに社会的に発展させると同時に、それを日本をはじめとした東アジアの類似の近代化経験とリンクさせ、比較社会的に論じることを目的とするものである。

2. 研究の目的

上記のような観点から、本研究では「ニュータウン」や「集合住宅」「団地」のような、社会主義ポーランドでも戦後日本でも共通して見られた特徴的な都市空間に着目し、それらを比較社会的に考察することを目標とした。まず、ポーランドにおいては、私が以前から調査を続けてきたノヴァ・フータ地区に代表されるような、「社会主義的近代化」の一環として建設された都市や集合住宅における「社会主義的近代化」や都市経験の記憶を、住民からのインタビュー調査によって明らかにすることを目標とした。同時に、日本における「ニュータウン」や「団地」などの都市近代化の記憶をそうしたポーランドの事例との比較のもとで検討することで、最終的には20世紀の近代化・産業化に伴うさまざまな「ユートピア的」な試みと、その記憶が現在の人々の生に対して持っている意味を明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

研究方法としては、まずポーランドにおいては私がこれまで主に調査を行ってきたノヴァ・フータ地区に加え、やはり社会主義時代に建設された計画都市として代表的なものであるシロンスク県ティヒを中心的な研究対象に据え、そこにおいて住民および地元の博物館関係者等への聞き取り調査および文献調査を行った。その他にも、適宜必要に応じてポーランドの他の地域・都市等においても補充的な調査を行った。他方、日本の事例においては、当初はポーランドと同様の聞き取り調査を中心とした調査を検討していたが、研究を進めるうち、そうした調査を行う以前の課題として、戦後日本文化における「団地」の位置づけや表象など、より多面的な観点からのアプローチの必要を感じたため、聞き取り調査等は今後の課題とし、本研究課題の枠内ではさしあたって「団地」を扱った文学作品を集中的に検討することを通じて、現代日本社会における「団地」をめぐる想像力のあり方を明らかにするための予備的考察を行うことを目指した。

4. 研究成果

研究の結果、主に明らかになったのは以下の諸点である。

(1) 社会主義の記憶と社会主義の遺物の「文化遺産化」

まず、ポーランドでの調査においては、先述の通りポーランドのティヒ市において主に調査を行った。具体的には、2016年の2月から3月にかけて集中的にティヒに滞在し、同地の住民および同地に存在する「ティヒ市博物館」の関係者に聞き取り調査を行った。その結果明らかになったのは、同地における「社会主義の遺物」の両義性である。ティヒでは、2005年の「ティヒ市博物館」オープン以降、初期に建設された「社会主義リアリズム」様式の団地や彫像などの「文化遺産化」が進んだが(Lipok-Wierwiazzonek 2009)、興味深いのはこの際の「文化遺

産化」の論理である。そこにおいては、社会主義時代の遺物は、決して「社会主義の遺産」としては保存されず、むしろ極力社会主義との意味的つながりを排除した、ニュートラルな形で保存が目指されることとなるのである。

類似の傾向は、ノヴァ・フータの博物館展示、さらには、ワルシャワの「第十パヴィリオン博物館」内の「1950年代のポーランド彫刻ギャラリー」の展示など、私が本研究課題内で調査をしたポーランドの他の地域における博物館展示などでも確認できる。また、とりわけ近年のポーランドの政治・社会動向と関連して興味深いのは、たとえばザブジェ市の「労働英雄ブストロフスキ像」など、公共の場に設置された記念像の保存の事例である。ポーランドでは近年、「脱共産主義法」の改正によって、共産主義体制を賛美するような記念像を公共の場から撤去することが義務付けられるようになったが、こうした政治的圧力のもとでかつての社会主義時代の記念像を保存するために、ザブジェの事例では記念像の名前までが変えられることで像の保存が可能になったという(Watoia 2018)。これらの事例においては、人々は逆説的にも社会主義体制に「言及しない」ことによって社会主義の遺物の保存を行っているのである。

こうした研究の進展の過程において、日本の社会学者たちの「文化遺産の社会学」の研究潮流(荻野編 2002; 木村 2014 など)と出会えたことは僥倖であった。とりわけ近年の産業遺産ブームなどを背景に、モノの「遺産化」現象を社会学的考察の対象に据えたこれらの研究者との交流によって、社会主義の記憶をテーマとした私の当初の研究課題は、「文化遺産化」という新たな分析視角を得ることになった。そこで明らかになったのは、人々の社会主義にまつわる記憶や想像力と、そうした記憶に関連した、その場に存在する具体的な「場所」や「モノ」との間の複雑な関係性である。そこにおいて見られるのは、しばしば「記憶の政治学」などの文脈で言われるような、人々が現在における利害関心に従って過去の遺物の意味付けを行う、といったような単純な図式ではない。むしろ、(現在のポーランドにおける支配的言説に則って)いくら人々が社会主義の遺物を中立的でニュートラルな意味付けのもとで保存しようとしても、そこにはかつての社会主義体制の痕跡が決して脱色できないような形で残存するのであり、そうした過去から残存するモノそのものが放つ物質的な存在感こそが、過去の社会主義体制に関する新たな記憶や想像力のあり方に道を開いていく可能性を有しているのである。

(2) 団地ノスタルジアのゆくえ：新たな共同性の構想へ向けて

次に、日本の「団地」をめぐる想像力に関する研究への足がかりとなるような予備的考察として、本研究においては近年の日本における団地をめぐるノスタルジア、すなわち「団地ノスタルジア」に着目し、考察を行った。具体的には、現在の団地ノスタルジアにつながるような先駆的想像力を有していたものとして、安部公房の『燃えつきた地図』(安部 1967)に着目し、詳細な分析を行うと同時に、そうした想像力が現在の団地ノスタルジアにどのように受け継がれているのかを、柴崎友香の『千の扉』(柴崎 2017)を例として分析することで明らかにした。分析の結果、明らかになったのは以下の点である。まず、団地ノスタルジアとは決して何らかの美化された過去への回帰願望ではなく、むしろ時に徹底して「反ノスタルジア的」「反ユートピア的」な想像力である。すなわちそれは、過去に措定された「幸福な過去」へと回帰することで共同性や全体性を回復しようとするような素朴なノスタルジアやユートピア主義とは一線を画すものであり、むしろ過去に対するより反省的・批判的な態度のありかたを示唆している。そしてこの反省的・批判的想像力としての団地ノスタルジアは、安易なユートピアへの回帰による共同性の復活を拒絶しつつ、新たな形での「共同性」を模索する想像力である。そうした共同性は、団地という場が孕む「危機」や「空虚」から目をそむけるのではなく、逆にそれに徹底的に向き合うことから生まれうるものなのである。

「3. 研究の方法」でも述べたとおり、上述の研究成果は当初の研究計画において予定していたのとは異なるアプローチから得られた成果ではあるが、その結果として当初の研究計画では想定していなかったような新たな視角を得ることができた。当初予定していたような、聞き取り調査等も含めた現地調査に関しては今後の課題である。

(3) 団地とオシエドレ：比較社会学的考察に向けて

これらの分析から明らかになるのは、私がこれまでポーランドにおいて検討してきたような社会主義の記憶をめぐる想像力のあり方と、日本の「団地ノスタルジア」に典型的に見られる想像力との間に見られる相同性である。この想像力のあり方を、私は、ユートピアが終わってしまった後に、その事実を冷徹に認識しながらなお新たなユートピア的次元を追い求めようとするような想像力のあり方、すなわち「ポスト・ユートピア的想像力」として概念化した。Boym (2001)などに示唆を受けたこの概念によって私が名指そうと試みたのは、過去の無垢で純粹な「ユートピア」への幸福な回帰がもはや絶対的に不可能であるということ冷徹に認識しつつも、なお現在の只中においてユートピア的な次元を追い求めるような、絶えざる自己反省と現在の創造的再解釈の終わりなきプロセスによって特徴づけられるような想像力のあり方である。「団地ノスタルジア」が孕んでいるのはまさにそのような想像力のあり方なのであり、その点において日本の団地をめぐる想像力は、ポーランドのかつての「社会主義都市」における記憶のあり方と通底するようなものとして捉えることが可能である。

こうした比較社会学的考察において、日本の「団地」やポーランドの「集合住宅」(ポーランド語では日本における「団地」に相当するような集合住宅のことを「オシエドレ」(Osiedle)

と言う)のような、20世紀の近代化の過程で建設された特徴的な居住空間の具体的な物質性と、それが人々に対して有していた(あるいは今も有している)意味が決定的に重要である。どちらの場合においても、文脈は違えど、こうしたかつての近代化の過程で建設された集合住宅が、一種の「文化遺産」として扱われたり、あるいは「ノスタルジア」の対象となりつつあるプロセスが確認された。また、日本においては「団地」という具体的な居住空間がそこに住む住民に対して持っていた意味に着目し、そこにおいて生まれた「政治」(原 2012)や「日常生活批判」(祐成 2008)の可能性に言及するような議論が見られるが、同様の議論はポーランドをはじめとした旧東欧の社会主義圏でも可能なはずである。この点についてのより詳しい研究は今後の課題である。

<引用文献>

- 安部公房、[1967] 2002、『燃えつきた地図』(新潮文庫、改版)新潮社。
Berdahl, Daphne, 2010, *On the Social Life of Postsocialism: Memory, Consumption, Germany*, Bloomington, Indiana University Press.
Buck-Morss, Susan, 2000, *Dreamworld and Catastrophe: The Passing of Mass Utopia in East and West*, Cambridge: MIT Press. (= 2008, 堀江則雄訳『夢の世界とカタストロフィ 東西における大衆ユートピアの消滅』岩波書店.)
Boym, Svetlana, 2002, *The Future of Nostalgia*, Basic Books.
原武史、2012、『団地の空間政治学』NHK出版。
木村至聖、2014、『産業遺産の記憶と表象 「軍艦島」をめぐるポリティクス』、京都大学学術出版会。
Lipok-Wierwiaczonek, Maria, 2009, *A jak Anna. Wczoraj i dziś pierwszego osiedla „Nowych Tychów,”* Tychy: Muzeum Miejskie w Tychach.
落合恵美子(編) 2013、『親密圏と公共圏の再編成 アジア近代からの問い』京都大学学術出版会。
荻野昌弘(編) 2002、『文化遺産の社会学』新曜社。
柴崎友香、2017、『千の扉』中央公論新社。
祐成保志、2008、『住宅の歴史社会学』新曜社。
Watoła, Judyta, 2018, “W Zabrze wymyślili, jak uratować pomnik Wincentego Pstrowskiego,” *Gazeta Wyborcza* (Katowice) 6/11/2018.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

- 菅原祥、「団地ノスタルジアのゆくえ 安部公房と柴崎友香の作品を手がかりとして」、『京都産業大学論集 社会科学系列』第36号、pp.75-102、2019年(査読有り)。
https://ksu.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=10284
菅原祥、「『社会主義の計画都市』の現在と過去の記憶 ポーランド、ティヒ市の調査から」、『開智国際大学紀要』第16号、pp.19-32、2017年(査読有り)。
https://www.jstage.jst.go.jp/article/kaichi/16/0/16_19/_article/-char/ja
菅原祥、「スタニスワフ・レムにおけるロボットの身体 短編『テルミヌス』を中心に」、『開智国際大学紀要』第15号、pp.5-17、2016年(査読有り)。
https://www.jstage.jst.go.jp/article/kaichi/15/0/15_KJ00010182239/_article/-char/ja

[学会発表](計1件)

- 菅原祥、「文化遺産は社会主義の夢を見るか? ポーランドのティヒ市における社会主義体制の遺物をめぐって」、第89回日本社会学会大会(九州大学) 2016年。

[図書](計1件)

- 菅原祥、『ユートピアの記憶と今 映画・都市・ポスト社会主義』京都大学学術出版会、284頁、2018年。

6. 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。